江崎知事　×　大垣商業高等学校

若者未来デザイン会議　開催概要



（知事と教育長、大垣商業高等学校の皆さん）

１．日　時

令和８年１０月１５日（木）　１０：５０～１２：００

２．場　所

大垣商業高等学校

３．参加者

大垣商業高等学校　３年生　１９名

知事、教育長、知事公室長、商工労働部長

４．タイトル

地域の未来を支える高校生　×　地元企業マッチングプロジェクト

５．知事への提案及び意見交換の概要

〇大垣商業高等学校の取組紹介

※大垣商業高等学校簿記部が取り組む「高校生コンサル」の研究成果を発表



○提案概要

【取組】

簿記部では、３年間学んだ簿記会計の知識を使い、地元企業のコンサル活動に取り組んできた。

その中で、地元企業は社長との距離が近く、高校生の意見に対しても「それ面白いね、やってみよう」とすぐ反応してもらえることや、「高校生だからこそ見える視点がある」と受け止めてもらえることが分かった。

また、社員同士の距離も近く、訪問すると温かく迎えてもらえる雰囲気があり、将来働くイメージが自然と湧いてきた。

さらに、SNS 発信や売上分析、DX 支援など、学校で学んだことがそのまま役に立つ場面も多く、企業から「高校生の分析が一番分かりやすい」と言われたこともあった。高校生の学びと企業の課題は非常に噛み合っていると感じている。

【課題】

コンサル活動を通じて、多くの企業から「若い人が来ない」「採用が難しい」という声を聞いており、人材不足が深刻になっている。

また、自分たちもコンサル活動をするまでは地元企業について深く知らなかったように、若者に地元企業の魅力が十分伝わっていない。「知られていない＝選ばれない」という現実がある。

さらに、このような活動は企業と学校とのつながりによって成り立っているが、学校ごとの取組に依存しており継続性がない。後輩や他校の生徒が同じ経験をできる保証もなく、企業のお悩み解決に高校生が取り組めることを、校種を問わずもっと分かりやすく伝えられるとよい。

【提案】

高校生と地元企業をつなぐ「高校生×地元企業マッチング制度」を創設する。

一つ目は、高校生の学びを企業で生かす場を県がコーディネートすることである。売上分析、SNS 戦略、商品企画、DX 支援など、高校生が実際に役に立てるプロジェクトを県がつなぎ、一過性の企業ガイダンスやインターンシップではなく、授業の中で継続的に経営支援や広報活動に関われるようにする。

二つ目は、企業側の受入体制を県がサポートすることである。高校生を受け入れ可能な企業の登録制度やガイドラインを整備し、高校生と顕著な成果を上げた企業を表彰する仕組みを設ける。

また、県公式 SNS での特集や PR 支援、県主催イベントでの優先出展、高校生受入企業としての公式認定、補助金申請時の加点などを行う。さらに、SNS アドバイザーを県費で招聘することや、交通費・保険への支援により継続的な関わりにつなげる。

三つ目は、学校間の取組格差をなくす県主導のプラットフォーム整備である。オンラインマッチングサイトに高校生の活動実績を蓄積し、後輩へ引き継げる仕組みを作ることで、企業側もどのような高校生が何をできるのか分かるようにする。

【期待する効果】

高校生は学んだことを実際に使う経験を得ることができ、地元企業の魅力を知ることで将来像が明確になる。

企業は若い視点による改善提案を得ることができ、企業イメージの向上や将来の雇用、売上の獲得につながる。

また、若者の県外流出を抑え、地元企業に育てられた若者が地域に残って担い手となる

ことで、中小企業の活性化につながる。

企業と関わる中で「地元にはこんなに魅力的な企業があるんだ」と感じ、岐阜県で働きたい、岐阜県を支えたいという思いが生まれた。この経験を後輩たちや県内の高校生にも広げ、高校生が企業と出会い、学び、挑戦し、地域を支える学びの循環をつくっていきたい。



〇意見交換概要

【知事の感想】

高校は将来について考える大事な時期であり、皆さんのように地域の課題を真剣に考え、地域に貢献する取組を行うことは学びとして非常に意義がある。

【教育長の感想】

令和６年に艶金の取組について校長室で話を聞いたことがあり、日々の学びが実際に生きていることを感じた。また、その取組が後輩へしっかり引き継がれていることに感動した。

当時との違いとして、今回はプレゼンテーション力が大きく向上していると感じた。前回は校長室で限られた人数に向けた発表だったが、今回は短い時間の中で相手にしっかり訴えかける発表になっていた。

近年は５分から１０分程度のピッチで相手に思いを伝える力が求められており、そのような表現力を皆さんが身に付けていると発表を通じて感じた。



【商工労働部長の感想】

商工労働部の職員には大垣商業高校の卒業生もいる。本日の会議が始まる前にも将来どのような仕事をしたいか皆さんと話をしたが、県職員として働くことも選択肢として考えてほしい。

県庁の商工労働部に皆さんが来てくれることで、企業や労働者のためにさらに良い仕事ができるのではないかと感じた。



【提案に対する知事のコメント】

発表内容は非常にすばらしく、本質を突いた提案であると感じた。

特に高校生コンサルの取組については、日本中がまだ気付いていないことに気付いていると思う。日本は改善や無駄取りによって生産性を高めてきたと言われているが、本当に大きな無駄は、お客さんが必要としていないものを作ることである。その視点に立つと、単に経費を削減するのではなく、お客さんが食べない弁当が大量に作られていることに気付いた点は非常に重要である。

社会に出ると、言われたことをきちんとやることは大切だが、パーツではなく、全体を見てどこに無駄があるのかを考えることが必要になる。そうした視点はこれからも大切にしてほしい。

また、高校生の視点で地元企業を見るという提案も本質を突いている。過去に大学生と企業を結び付ける取組を進めたことがあるが、学生が期間限定で企業に行くことで、企業の中で当たり前になっていたことが変わるという経験があった。学生を受け入れたことで、社員が時間を守るようになったり、挨拶をするようになったりして、生産性が向上したという話もあった。

高校生が企業と関わることで、企業に新たな刺激を与えることができる。皆さんが関わることで、企業の雰囲気や考え方が変わることもある。

また、簿記で培った数字で見る力は大きな強みである。経営を印象や感覚で判断するのではなく、数字を見て考えることは非常に重要であり、その点は皆さんの大きなアドバンテージになる。

さらに、SNS を活用した発信力も強みである。どれだけ良いものを作っていても、知られなければ選ばれない。企業にとっても地域にとっても、まず情報を発信して知ってもらうことが重要であり、バズることや情報発信の力は大きな意味を持つ。

提案の中には、県として取り組めるものも多く、国に働きかけることで制度や税制の見直しにつなげられる可能性もある。事実やデータを基にしっかり説明できれば、国も当然

動き、社会を変えることができる。
　今日の発表は、そのまま政策につながるような内容であり、自信を持って取り組んでほしい。質問が出てこないほど感動した発表であり、非常にすばらしかった。
　皆さんから何か県に対する質問はないか。



【生徒の質問】
　知事が考える岐阜の一番の魅力は何か。

【知事の回答】
　岐阜県は魅力があり過ぎる県である。一方で、東京などで岐阜県の魅力を聞かれると、「何もない」と答えてしまう人が多い。
　私は旧山県郡美山町の出身であり、自然が豊かなことや川の水が透明で飲めることを当たり前に感じて育ってきた。しかし、それ自体が大きな魅力である。
　また、岐阜県は日本の真ん中に位置していることは大きな強みである。高速道路が東西南北につながっており、将来に向けて様々なチャンスがある。
　県土の 81%が森林であり、この資源を生かして食料とエネルギーを県内で賄える体制をつくろうとしている。
　さらに、南海トラフ地震が発生した場合、静岡県や愛知県、三重県では大きな被害が想定されているが、岐阜県の被害は近隣県より小さいと想定されている。自分たちの身を守ることに加え、愛知県や三重県、静岡県の被災者を受け入れる県になることを見据え、準備を進めている。
　このように岐阜県は日本の真ん中にあり、地盤が安定し、津波の心配がなく、自然が豊かである。食料やエネルギーを自立できるようになれば、人やモノが集まる県になると考えている。

【生徒の質問】
　最近一番大変だった仕事は何か。

【知事の回答】
　仕事は大変なこともあるが、「楽しくなければ仕事ではない」をモットーにしている。農業については、後継ぎがいない、担い手不足だと当たり前のように言われているが、岐阜県ではその常識を変えようとしている。

農業を始めようと思うと大きな初期投資が必要であり、機械などをそろえなければ始められない仕組みになっている。そのため、農業をやってみたい人がいても参入しづらい状況になっている。

そこで、使われなくなった施設や機械を活用する「居抜き」の仕組みを始めた。農協の協力も得ながら、アグリパークということで、土地や機械を借りて農業に挑戦できる環境を整えている。

また、売る場所がないという声に対して県庁マルシェを始めたところ、想定を大きく上回る売上があり、消費者から直接反応を得られる場にもなっている。農家からも、消費者に直接販売できることの面白さややりがいを感じるとの声が出ている。

そのため、地産地消ではなく、食べたいものを地元で作る「地消地産」へ転換しようとしている。

小規模な農地でも収益を上げている事例があり、農業はきちんと利益を出せる仕事であり、楽しい仕事にもなる。

当初は反対もあるかと思っていたが、今では全面的に協力を得られている。岐阜から農業を変え、食料自給率の向上につなげていきたい。

岐阜県の食料自給率は決して高くなく、これだけ広大な土地がありながら十分に生かし切れていない状況がある。

そのため、マーケットをどうつくるかが重要になる。例えば、美濃市と名古屋を結ぶ高速バスで野菜を運ぶ仕組みを取り入れたところ、多くの野菜が売れるようになった。

こうした取組は最初は大変だが、一度乗り越えると大きな成果につながる。

国で働いていた頃から、よく「火中の栗を拾う」と言われてきた。火中の栗は剥いてみると意外にもおいしかったりする。大変な仕事は誰も手を付けていないことが多く、最初に取り組むのは苦労するが、その分成果も出やすい。

企業活動も同じで、既に誰かが成功していることを追いかけるだけでは大きな成果は生まれにくい。むしろ、誰もやっていないところにこそビジネスチャンスがある。

大変なことに挑戦することは楽しいことでもあり、そのような視点を持って取り組んでほしい。

【商工労働部長のコメント】

知事の話にもあったが、「楽しくなければ仕事ではない」ということを商工労働部では大切にしている。

本当に難しい仕事の中にこそビジネスチャンスがある。また、スタートアップやベンチャー企業にも、社会の課題や困りごとを解決しようとするところにビジネスチャンスがあるという話をしている。

社会の課題に向き合いながら、その解決に取り組むことが新たな仕事や価値につながる。そうした取組を、皆さんとも一緒に進めていけるとよいと思う。

【生徒の質問】

飛騨地方には高山や下呂などがあり、ドラゴンルートと呼ばれる観光ルートもある。一方で、美濃地方にはそのような観光ルートがあまりないように感じる。

その中で、美濃地方へ外国人観光客や日本人観光客をどのように呼び込んでいくのか伺いたい。

【知事の回答】

昨年１年間に岐阜県に宿泊した外国人は隣県よりもかなり多くなっている。

飛騨地域には高山や白川郷、下呂温泉などがあるものの、単品であった。そのため、それらをつなぐプログラムを作り、世界に発信する取組を行っている。

一方で、美濃地域にも魅力は数多くあるが、知られていないものが多い。岐阜大仏や名和昆虫博物館など、全国的にも貴重なものがあるが、それぞれが個別に存在しており、十分に結び付けて発信できていない。

新しい観光資源をつくるというより、既にあるものをどうつなげて発信するかが大切である。

また、今後はリニア中央新幹線の開業によって、東京との時間的距離が大きく縮まる。岐阜県駅のできる中津川市やその付近にある中山道の馬籠宿や妻籠宿などは既に外国人観光客に人気があり、特に歩く旅を好む人たちから注目されている。

さらに、関ケ原古戦場や養老天命反転地、長良川鵜飼など、県外の人には人気があるが、県内の人はあまり行かない。

美濃地域はこれまで大きな危機感を持たなくても成り立ってきた地域だからこそ十分に発信されてこなかった面もあるが、まだ掘り起こされていない魅力が数多く残っている。

今までの当たり前の延長線上ではなく、そうした魅力を見つけて発信していくことで、大きな可能性があると考えている。

【生徒の質問】

先ほど、質問した人と被ってしまうが、岐阜県で一番有名にしたい場所はどこか。

【知事の回答】

岐阜県には魅力的なものがたくさんあるが、まずは岐阜を名古屋の人たちが週末に訪れる場所にしたいと考えている。

岐阜は自然が豊かなだけではなく、良いものを比較的手頃に楽しめるという強みもある。例えば、三重県とも連携して漁港から魚を運び、柳ヶ瀬に魚市場のような機能をつくり、良いものを食べるなら岐阜へ行こうと思ってもらえるようなまちにしたい。

また、人が集まりやすい環境づくりも進めたい。県庁には多くの人が訪れるようになっており、ドラマのロケ地として活用されたことも一つのきっかけとなっている。そうした場所を生かしながら、多くの人が訪れたくなる場所にしていきたい。

さらに、県庁の近くにあるサラマンカホールは世界屈指の音楽ホールであり、優れた音響環境を備えている。このような魅力的な施設も岐阜には数多くあるが、十分に知られていない。

岐阜には優れた観光資源や施設が各地にあり、それらが身近にあり過ぎて当たり前になっている面もある。こうした資源をうまくつなげて発信していくことが重要である。

また、大垣城周辺にも大きな可能性がある。大垣城は魅力的な資源であり、その周辺も含めたまちづくりを進めることで、多くの人が訪れる場所になると思う。皆さんにもそうした視点で考えてもらえるとよい。

【生徒の質問】

岐阜県で有名にしたい食べ物や食文化を伺いたい。

【知事の回答】

観光で大事なのは、やはり食べることである。

これまでは飛騨牛のブランド化を進めてきたが、最近は脂が多いのではないかという声もあり、飛騨牛についても様々なバリエーションを考えていきたいと思っている。

また、県を挙げて取り組んでいるのが鮎である。鮎は岐阜県を代表する食材だが、外国人の中には頭が付いた魚を食べることが苦手な人もいる。そのため、ホッケのような大きな鮎を育てるなど、食べてもらいやすい形も考えている。

さらに、東濃地域には栗きんとんをはじめ、地域ごとに魅力的な食がたくさんある。挙げ始めるときりがないほどである。

飛騨牛はかなり知られるようになってきたが、鮎といえば岐阜県と言われるようにしたいし、それぞれの地域が持つ食の魅力ももっと発信していきたいと思っている。

逆に何か有名にしたい食べ物はあるか。

【生徒の回答】

岐阜県のお米がおいしいため、ハツシモの魅力を広げてほしい。

【知事のコメント】

ハツシモは寿司米としても高い評価を受けることができる米である。

一方で、お米をお米だけで売ろうとすることが多いが、お米とほかのものを組み合わせて発信していくことで、さらに良いブランド米になると思う。

また、昨年の米不足を通じて分かったことの一つは、せっかく良い米を作っても他の米と混ぜられてしまい、その良さや価値が十分に伝わらなくなってしまうことである。

そのため、消費者へ直接販売するなど、お米そのものの良さが伝わる仕組みも大切になる。そうすることで、ハツシモの魅力もより生かせると思う。

【生徒の質問】

知事の話を伺って、住んでいても知らないことがたくさんあると感じた。その中で、現在全国的に有名になっている白川郷や飛騨牛は、どのようにして有名になったと思うか伺いたい。

【知事の回答】

飛騨牛についてはと畜場（牛を肉に加工する場所）の整備を進めたり、海外へ売り込んだりしてきた。また、各国の大使館を活用して試食会を開き、海外の経済界の関係者などに飛騨牛を知ってもらう取組も行ってきた。

東京でもマスコミを集めて試食会を行った。その際、飛騨牛や岐阜県産米の「龍の瞳」と他の産地のものを食べ比べてもらったところ、飛騨牛と龍の瞳の評価が高かった。良いものは実際に食べ比べてもらうことで、その良さが伝わる。

良いものを作っていれば自然に売れるわけではなく、知ってもらうための働きかけが必要である。そうした意味では、SNS による発信など、新しい視点、新しいツールを使いながら、多くの人に知ってもらうことが重要であり、一度有名になれば、味を知らなくても選んでもらえるようになる。

現在は、岐阜県を訪れた外国人観光客が岐阜で味わったものを、自国へ帰った後も購入できる仕組みをつくりたいと考えている。そうすることで生産量が増え、収益も上がり、

さらに生産者が増える流れにつなげていきたい。

〇総括

【教育長のコメント】

先日、東京でスタートアップ企業が集まる大きなイベントに参加したが、政府もスタートアップやベンチャー企業に大きな期待を寄せていることを感じた。

岐阜大仏は籠大仏と呼ばれており、岐阜が産地である提灯と同じ作りをしている。観光資源はその土地の産業や歴史と結び付いて生まれたものが多い。それを掘り起こしていくことが大切であるが、そこで大事なのは、地域の歴史や地域そのものへのリスペクトを持つことである。

また、今日の発表や企業への提案は、高校生だからこそ受け入れてもらいやすい部分もある。しかし、これから社会に出れば、そのような前提はなくなる。今経験していることを土台にしながら、将来は自分自身の力で勝負していってほしい。

さらに、今は AI による大きな変化の時代を迎えている。こうした時代だからこそ、芸術や文化、文学、音楽などに触れ、自分が何を感じるのかという感性を磨くことを大切にしてほしい。

そのためには幅広く学ぶことも重要である。商業の学習だけでなく、英語や他教科の勉強、部活動など、高校生のうちに様々な経験を積み、多くのことを吸収してほしい。それがこれから長い人生を歩んでいく上で大切な土台になる。

また、大垣商業高校は、西濃地域の多くの企業に囲まれた環境の中で学んでいる。この地域には日本を代表する企業も多く、その環境は大きな強みである。

今後も、その恵まれた環境や地域の強みを生かしながら、商業の学びを深めていってほしい。

【知事のコメント】

大垣はもともと東西文化の結節点であり、新しいものが生まれる場所である。世の中が大きく変わろうとしている今、大切なのは知識や常識だけに頼らないことである。

人は知識や常識によって判断を誤ることがあり、AI もまた、これまでの知識や常識の延長線上の答えを出すことが中心になる。一方で、人には様々な経験を通じて培われる感性がある。何が良くて何がいけないのか、人にとって何が良いのかを考える力が、人と AI との大きな違いである。

そのため、簿記や商業の学びだけでなく、自然や芸術など様々なものに触れ、多くの経験を積んでほしい。

また、皆さんには幸せになってほしい。そのための一番簡単で確実な方法は、誰かを幸せにすることである。人でも動物でも植物でもよい。誰かのために行動することが大切である。

東日本大震災の際、被災地から食べ物や衣類ではなく花を送ってほしいという要望を受けたことがあった。家族や家を失った方々が、持ち帰った鉢植えの花に水をやることで、生かされている命を感じることができたという話を聞いた。後に現地を訪れた際にも、花が心の支えになったという言葉をもらった。

お金を稼ぐことも大切だが、誰かを幸せにした結果としてお金や人とのつながり、より良い社会が生まれる。そうした考えを持って進んでいけば、岐阜県だけでなく、この国も良くなっていくと思っている。